特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果，世界的位置付けなど。
（※評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容）

＜特筆すべき教育活動＞

本研究科国際文化交流論専攻国際環境システム論講座は、「自動車静脈産業における産学連携と国際交流」と題する研究に取り組むと同時に、この研究に学生を直接参画させることによって優れた教育実績をも挙げている。これは、近年脚光を浴びている「持続可能型社会・産業」を構築して人類社会が直面する喫緊の問題の解決に寄与するという点で現代国際社会に大きく貢献する研究教育活動であり、この活動に参画した国際環境システム論講座後期課程の学生が、平成 21 年度『東北大学藤野先生記念奨励賞』を受賞したことは、特にその教育面の実績が高く評価されたことを示すものである。

平成 16 年度に始まる国内外の学会における口頭発表や学術誌への論文投稿に必要な外国語（英語やドイツ語、フランス語だけでなく、外国人留学生にとっての外国語である日本語を含む）の運用能力を高めるためのプログラムの検討作業を承けて、当該プログラムの一環として、平成 18 年度から、いずれも口頭発表の技術及び論文作成法を指導するための演習形式の授業科目で、主として日本人学生を対象とする「研究のための英語スキル」及び原則として外国人留学生を対象とする「研究のための日本語スキル」を共通科目中に開設しているが、平成 21 年度には、それぞれの授業内容について一層の充実・改善を図った。受講生からは、学生による授業評価の結果によれば、大いに有益であったという高い評価が寄せられている。実際、これらの授業科目の開設目的に相応して、これらの授業科目を開設した平成 18 年度に国内外の学会において口頭発表をした学生及び学術誌に論文を投稿した学生の数は、開設前に比べていずれも一段と増加したが、この増加の傾向は在籍学生数の減少にもかかわらず、平成 21 年度においても顕著である。

＜特筆すべき研究活動＞

本研究科では、人文・社会科学、自然科学及び言語科学の諸分野において伝統的な概念や方法論の枠組みを超えた総合的・学際的な研究を展開しているが，本研究科を中心に組織された21世紀COEプログラム「言語認知総合科学戦略研究教育拠点」(平成14～18年度）の後を承けた研究科附属言語脳認知総合科学研究センターを中心として，fMRI（機能的核磁気共鳴画像法）装置による脳機能画像の分析を通した脳の言語機能の解明その他の言語科学の分野における研究を推進し，優秀な若手研究者を輩出するとともに，脳の言語機能に関する多くの新たな知見をもたらし、特に、平成21年度は、言語学各分野の創設者やリーダーが執筆し、世界最高の言語学出版社が出版した言語学書籍*Oxford Handbook of Linguistic Analysis*に執筆参加したこと、脳イメージング手法を用いて語用論的な視点転換を脳機能的に確認した論文が世界的権威の雑誌*Journal of Neurolinguistics*に掲載されたこと、フランス語譲渡不可能所有構文が制御構文と同じ操作により説明できることを示した論文が国際的に認知された言語学雑誌*Lingua*に掲載されたことなど、大きな学術的成果を収めている。

＜特筆すべき社会貢献活動等＞

本研究科は、教育・研究成果を社会に還元するため、これまで多くの社会貢献事業を展開してきているが、平成21年度は、以下の3つの講演会およびフォーラムを一般市民に向けて公開で開催した。

(1) 第16回国際文化基礎講座を10月から11月にかけて3回開催した（詳しくは後述。参照：Ⅲ－(3)－(No.30)）。

(2) 研究科主催学術講演会「オバマのアメリカ―政治と宗教の新たな局面」（ロジャー・ロビンズ米国メリーラント大学准教授）を7月15日に開催した。

(3) 研究科主催（環境省、経産省、宮城県、仙台市、日本自動車工業会等後援）で「第2回アジア自動車環境フォーラム」を11月13日～14日に開催した。本フォーラムには世界11ヶ国約380名が参加し、その顔ぶれも関係省庁、各自治体、大学等研究機関、自動車・廃棄物関連企業・事業者、NPO・NGO関係者等多彩なものであった。